



# 空飛ぶ エイジョーズ

ホオジロザメが美しく舞う  
南アフリカの海

—「情熱大陸」の収録現場から—

2006年の6月、TV番組「情熱大陸」の収録を兼ねて  
南アフリカのサイモンスタウンまでやって来た。

目的はホオジロザメ。今回はケージ(檻)ダイビングだけではなく、  
エアージョーズと呼ばれるホオジロザメが  
水面からジャンプする撮影にも挑んだ。

撮影予定期間は4日間。限られた時間のなかで、  
ホオジロザメに接近撮を試み、その魅力に迫った。

Photo&Text: **Kagii Yasuaki**



**Information Link**  
<http://www.kagii.jp/>

←click! 情報HPへジャンプ



## ホオジロザメが 棲む海域に浮かぶ オットセイの島

ホオジロザメの撮影のために、サイモンズタウンの沖合いに浮かぶシールアイランド(seal island)に向かった。ボートでの所要時間は約30分。この数字がこの町でのホオジロザメと人間の距離だ。正直、その距離の近さに大変驚いた。

島には南アフリカオットセイ(アシカ的一种・cape fur seal)がたくさん生息している。1年のうち多い時は約68,000頭で、撮影時期は約40,000頭だと今回お世話になった Christopher Fallows(クリストファー・フォロズ)とMonique Fallows(モニーク・フォロズ)の2人のnaturalist(動物研究者)は教えてくれた。

島の風下に周り、ツンと鼻にくる強烈な動物臭がする。写真では表現できないのが残念で、のんびりと昼寝を楽しんでいる彼らの姿からは想像し辛いほどの臭い……。

島を眺めているとアフリカンペンギン(African penguin)の御一行を見つけた。冰山ならず、オットセイ山の佇む彼はとても愛くるしく、ここがホオジロザメの回遊する海であるということを忘れさせてくれた。

ホオジロザメが美しく舞う  
南アフリカの海

# 空飛ぶジョーズ



## 空を飛ぶ ホオジロザメは ひどく私を 現実の世界から 引き離した

早朝6時30分過ぎに艦を載せたボートは出港した。向かった先は、シールアイランド近くの海域。夜間、豊富な餌を求めてに沖合いに出ていたオットセイたちが、翌朝、シールアイランドに泳ぎ帰ってくる。ホオジロザメは、その時間帯に進路で待ち伏せしている。狙われるのは、生後6ヶ月以内の子供のオットセイだ。彼らは群れで移動しているが、泳ぎのまだ苦手な幼獣は泳ぎ遅れることが多い。そのはぐれてしまった幼獣が狙われる。

ボートクルーが巧みにオットセイを見つける。よく

見かけたのが3~5頭のオットセイの集団。連続的に水面から姿を見せ、シールアイランドまで泳ぎ急ぐ。そのオットセイに平行してボートを走らせる。しかし、ほとんどの場合、追いかけている集団とは別の場所で捕食(エアージュース)が始まる。はぐれてしまった多くの幼獣はホオジロザメに必ず狙われるという。

ホオジロザメのジャンプは、突然やってきた。水面を割って大きな黒いフォルムが飛び上がる。見つ

けた瞬間には、体半分が水面から現れている。そこに素早くカメラのレンズを向け、シャッターを押し続けた。ファイダーに中でも、はっきりとホオジロザメの動きを確認することができた。美しく宙に舞う魚。高速シャッター音と共に、まるでスローモーションの映像のように、今でも脳裏に焼きついている。正直、映画のセットで撮影しているのではないかという感覚にも陥った。それほど、空を飛ぶホオジロザメはひどく私を現実の世界から引き離した。

ホオジロザメが美しく舞う  
南アフリカの海 空飛ぶジョーズ

 Information Link <http://www.kagii.jp/>  click! 情報HPへジャンプ



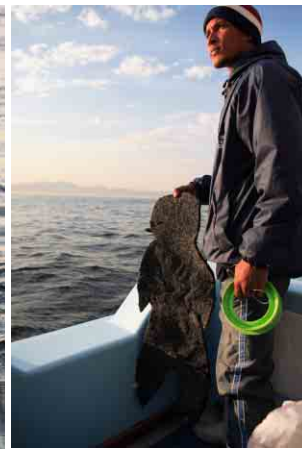
## 美しいホオジロザメのジャンプと オットセイの無残な死

いつも捕食のシーンを見れるわけではなかった、ボートが到着した後は、もうすでに死骸となり、水面に漂うオットセイも目撃した。海鳥たちが、その残骸を水面に降りてきては啄む。1羽の海鳥は、細長いロープのようなものを空中に持ち上げた。オットセイの腸だった。私はひどく滅入ってしまった。水中カメラマンとして、海のなかで捕食というシーンにも何度かであったが、大きな魚は小さな魚を丸呑みすることが多く、引き千切られた死骸を見ることはほとんどなかった。想像していなかった残酷なシーンだった。

## デコイを使って 撮影する

10時頃になると、今度はデコイと呼ばれる疑似餌(オットセイの形に切り取ったカーペット)を使用した撮影となる。ボートの後ろからロープに付けられたデコイを流し、ボートを走らせる。これまで紹介されているエアジョーズのすごい写真は、ほぼこのスタイルで撮影されたものだ。どこからホオジロザメが現れるのか予測が付く撮影自体は簡単だが、やはり自然の状況下での撮影のほうが、醍醐味がある。

ボートの後方に腰を据え、ホオジロザメが海面から飛び出してくる予測エリアに、カメラを構え続けた。左手が痺れても、目がかすんでも、その一瞬を逃がしたくはなかった。



ホオジロザメが美しく舞う  
南アフリカの海 空飛ぶジョーズ



エアージェーズの撮影を終えると、ケージ(檻)を使用してのダイビングが始まる。水中に飛び込むまでの動作は極めて単純。いつもと何ら変わらない行動だった。ただ、フィンを足に付けず、いつもの倍ほどのウェイト(腰に巻く錘)を装着する。そして、飛び込む先は、ボートに横付けてされた鉄製の重い蓋のある、ケージの中。今回、収録ということで3名用のケージを用意してもらったが、意外と狭く身動きが制限されるくらいの大きさ。大きなムービー

カメラを持ったカメラマンの古島茂さんと一緒に入ると、二人ともほとんど動くことができなかった。また、水面に浮いているこのケージは、波の影響をそのまま受ける。私たちは絶えず揺れ続けるケージの中で、踏ん張り撮影を続けた。実際、身体を固定することが難しく。片足はケージの外に出し、足首で固定することになった。少しでもケージに出ている部分がひどく気になったが、それ以外の方法が見つからなかった。

檻の中から見える風景

ホオジロザメが美しく舞う  
南アフリカの海 空飛ぶジョーズ



## モンスターの出現

目線の先には、モンスターがいた。体長は4mを超えている。前回のオーストラリアの海で出会ったものとは全く違う。これが、ホオジロザメなのだ、と思った。丸々太っている。いや、太ってるのではない筋肉の塊だ。あごのラインも力強く、ふてぶてしい。パナナことかもしれないが、その力強さに惹かれ、少し寄り添ってみたいと思った。

周りを泳ぐにホオジロザメは常に3~4匹いた。透明度があまり良くなく。水の色は緑色。少し遠くになると、サメはシルエットとなり、その後は緑色に塗り潰される。ちょうど目線のあたりに約40センチほどの枠があり、そこから撮影することができる。私は彼らに近づきたくて何度もそこから手を出して撮影した。でも視界にいる1匹は確認できるが、その他のサメへの注意は希薄になってしまう。自分では思いっきり手を伸ばして撮影しているつもりでも、少し逃げ腰になっている。前に行こうとすると気持ちに身体がついていかない。撮影に集中しているつもりでも、時折、変な想像をしてしまう。1匹のホオジロザメに撮影に夢中になり、手を伸ばしていると、視界の外からいきなりもう1匹のホオジロザメが現れ、私の腕をもぎ取ってしまう。私は、血だらけになって、クルーにボートの上に担ぎこまれる。真っ赤な血だけが妙にリアルな色を持っている。

……そうなってはいけない……。一時の高揚で何かも失ってはいけない。

最初の潜水は約1時間30分だったと思う。ドライツーツの下に身につけた大人用のオムツを使用することはなかった。撮影の手ごたえはあったが、まだまだ満足いく写真は撮影できていなかった。私は16mmフィッシュアイレンズから20mmレンズに変え、もっと近づきたいと願い、何度も一度海のなかに飛び込んだ。

ホオジロザメが美しく舞う  
南アフリカの海

# 空飛ぶジョーズ



不思議なもので、目の前にホオジロザメが泳いでいる景色が日常のものだと思えるようになってきた。緊張感がなくなってきたのではないかともう一度、集中するように自分に言い聞かせた。

ホオジロザメは、確実に私を餌だと認識していたはずだ。間近と通り過ぎるホオジロザメはしっかり私を見据えていた。基本的にはボートから海に放り込まれるマグロの頭に喰らい付いていたが、時折、注意深く檻のなかの私を観察する。恐怖を感じるのは、目の高さでホオジロザメが泳ぐときではない。檻の下など足元を通過するときにより恐怖を感じた。ロープを付けて投げ込まれる餌は、ホオジロザメが喰らいつく、タイミングの少し前に引き上げられる。彼らは上手く喰らいつくことができない。それでもホオジロザメは何度も繰り返し餌を狙う。たまに船上で餌を操っているクルーのちょっと気を許すタイミングがある。そんな時、ボートの陰になる深い海から

ずっと現れては、餌をもぎとってしまう。

単純な繰り返しに見えるが、時折行動パターンを変える。忍び寄るように、人間たちの裏をかく様に……。侮っていけない。彼は計算している。

ひどく怖いと思ったことがあった。それは、餌が海の放り込まれているのにも関わらず、1匹のホオジロザメが檻のそばで静かに浮上し、私たちの入っている檻とボートが繋がれているロープに喰らい付いた。水中で垂直に立ったまま思いっきり暴れ出した。ロープを食い千切る勢いだった。さすがにその行為後には撮影する気力が少し萎えてしまった。

いったい、あのホオジロザメは何を考えていたのだろう……。私と同じ結末を考えて行動していたのならば、もう檻のなかへ入る勇気を持ってそうになかった。嫌なことは後回しという私のダメな性格が幸いしてか、檻の中で対峙し続けることができた。

## ロープに喰らい付いたモンスターの計算



ホオジロザメが美しく舞う  
南アフリカの海

# 空飛ぶジョーズ



## サイモンズタウンの海岸線で ペンギンに出会う

取材2日目。朝5時に起床したが、外は風が強く、ボートが出る6時までホテルのロビーで待機することになった。海洋状況次第ではボートが出港できない状況だった。結局8時に、出港禁止の連絡がボートキャプテンからあった。あせる気持ちもあるが、まだまだチャンスはがあると、気分転換にボルダービーチに向かった。

ボルダービーチにはペンギンの保護区がある。そこでの撮影許可も頂いていたが、その保護区内にいるペンギンたちは人間を全く恐れることなく、あまり野生の覇気が感じられなかった。かつて西オーストラリアのモンキーマイアでイルカの撮影をした時と同じ気分になった。こんなのでは、撮影する張り合いがないと、その保護区外にペンギンに焦点を定めた。まったくの無法地帯に生息するお隣のペン

ギンたちは私たちの行動をつぶさに見つめ、近づくと戸惑ったり、逃げ出したり。

息を潜めて彼らの許してくれる撮影範囲内へ。幸せな時間が過ぎていく。ファインダーの中で彼が何か物語っているようだった。







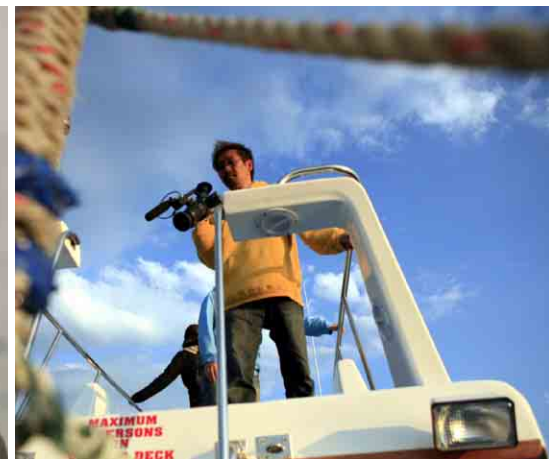
左) スチールカメラハウジングに小型ビデオカメラを設置する  
左下) 収録済みのテープ  
右) 女性陣はホルダーズビーチでペンギンに夢中?!



# 「情熱大陸」 収録スナップ




上) 自然遺産のテーブルマウンテンの頂上で撮影をする  
下) 早朝、まだ陽が昇らない前に港に向かう  
右下) 全ての撮影を終えて、港で記念撮影。最高の時間だった



左) ムービーカメラマンの古島アニキと佐々木さん  
上) 自らカメラを持つ野村ディレクター



## ホオジロザメが美しく舞う 南アフリカの海 空飛ぶジョーズ



オレンジ色の空の下、ファインダーの中で大きな魚が尻尾を、  
まるで弧を描くように水飛沫とともに回転した。  
美しい光景だった……。思わず息を飲んだ……。

撮影を終えた後、基本的な疑問にぶつかった。  
それは「いつから彼らは、  
この海で宙に舞うことを覚えたのだろう……」ということ。  
私たちがこの事実を知ったのは、  
約6年前にナショナルジオグラフィックという  
自然雑誌に紹介されてから。  
地元の漁師はもちろん、もっと前から知っていただろう。  
10年前から？  
50年前……それとも100年も前から、  
空に舞っていたのだろうか……  
現地のナショナリストは、その疑問の答えを持っているかもしれない。  
しかし、今はもう少し、  
そのことを考え度に悠久のロマンを感じていたい。

私の願いは、いつまでもこの海でホオジロザメが舞い続けること。  
これから先、何年も何十年も、それが繰り返されるならば、  
そんなに素敵なことはない。

—— 鍵井 靖章

ホオジロザメが美しく舞う  
南アフリカの海

# 空飛ぶジョーズ